

特集 薬局経営

在宅訪問の「質」底上げへ社内研究会 エスファーマシー、在宅マニュアルも構築へ

2025/4/3 04:50



在宅研究会には毎回20～40人が参加する



「乙訓調剤薬局」などの名称で薬局を運営するエスファーマシー（京都府長岡京市）は、在宅訪問業務に携わる薬剤師の質の底上げに注力する。在宅の社内勉強会である「在宅研究会」の開催を重ねているほか、今後1年以内を目安に、在宅に関するマニュアルの構築にも乗り出す。同社の在宅業務は一部の先進的な薬局が牽引している格好だが、研究会の開催やマニュアルの構築を通して、他の店舗でも質の底上げを図れば、地域医療にさらに貢献できるとみている。

薬局10店舗を展開する同社は2023年5月に初の在宅研究会を開催した。同社の薬剤師で、在宅推進教育課長の桑原宏昌氏は研究会を始めた理由について、「在宅の質が店舗によってバラバラだと実感したのが一番」と説明。「地域で牽引している（同社の）在宅支援薬局おとくに（京都府向日市）のレベルに、他の店舗も持っていけたら、地域の医療資源として、もっと地域医療を担える」とみている。



特定保険医療材料なども解説する

在宅研究会は夜の2時間をかけて開催。管理薬剤師や在宅に興味がある薬剤師など毎回20～40人が参加する。現在までに計8回開催しており、在宅に関する基礎知識や調剤報酬などのほか、特定保険医療材料、ポリファーマシー、嚥下機能評価などのテーマも取り上げてきた。

同研究会はグループディスカッションなど参加型のものが多い。特定保険医療材料をテーマとした時は高カロリー輸液、ポンプ用輸液セット、フーバー針、延長チューブなどさまざまなものを取りそろえ、参加者が実物を手にしながら、解説を受けた。

嚥下機能評価の時はとろみ剤を実際に作り、薬に見立てた菓子を一緒に飲み込むなど、いろいろなことを試してみた。桑原氏は「（参加者から）実際にやってみて、今まで気付かなかったことが気付けたという声があった」と振り返る。

ポリファーマシーの時は、減薬に携わった症例を紹介。手順や言い回しなど細かい部分も説明したところ、当時参加した8店舗全店でポリファーマシーの提案を行い、実際に服用薬剤調整支援料も算定できたという。

次回の在宅研究会に関しては、4～5月をめどに開催したい考え。内容は「疾患別のフォローアップ」を中心としたものを考えている。

●マニュアル、個人・施設の双方に対応

一方、マニュアルには在宅に関する手順、無菌調剤、フィジカルアセスメントなどの項目を盛り込みたい考え。個人宅・施設双方の在宅患者に対応できるものに仕上げる。完成したマニュアルは全店舗に落とし込み、薬剤師全員がレベルの高い専門的な業務内容を遂行できるようにする。

同社の在宅支援薬局おとくには約300人の患者を受け持ち、薬剤師7人と事務3人で対応。個人在宅患者が7割を占めている。(星光洋)



在宅推進教育課長の桑原宏昌氏（左）と代表取締役の石川達也氏